

天来の教会

[マルコによる福音書 6 章 30～44 節]

さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。そのうち、時間もだいぶたったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買って行くでしょう。」これに対してイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめて来て、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」そこで、イエスは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。人々は、百人、五十人ずつまとまって腰を下ろした。イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した。そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。パンを食べた人は男が五千人であった。

[1] ガリラヤの野に「教会」が生まれた

今日の聖書の箇所は、4つの福音書に共通して記されている物語です。5つのパンと2匹の魚で五千人以上の人々が満たされたという有名な奇跡の話です。確かに読めば読むほど不思議な話です。常識を超えています。けれど、私はきっとこのようなことは本当に起こったのだろうと思います。そして実際に大きなインパクトを与えた。そうでなければどの福音書も揃ってこの物語を書き記すということは無かったでしょう。

しかし、パンと魚が増えたというこの奇蹟、「何の意味があるのだろう」と思ってしまう。もっと神的な力強さで天変地異のような派手な奇跡もなさることが出来るはずです。パンと魚が増えるというのは決して派手なことではあ

りません。しかし、この出来事は、人々を驚嘆させる奇跡というよりも、そこに集められた人々が文字通り“満たされる”奇跡だったのではないかと思います。私は、この「現象」を説明することよりも、そこで「起こっている」ことに思いを馳せることが大事なのではないかと思いました。人々は「本当にイエス様と共にある交わりの中で祝福された」という経験をしたのではないのでしょうか。それは、私は「礼拝」という出来事の祝福がここで起こっていたのではないかと思うのです。

面白いと思うことは、ここでイエス様が、50人、また100人の組を作ってこの青草の上に座らせている、ということです。何千人も一塊というのではなく、一クラスのような単位、一つの教会のような単位ではないのでしょうか。そうです、**ここには「教会」が生まれている**と思います。イエス様がいなければ、この教会は生まれてこないという事実です。また、弟子たちがイエス様の素晴らしい業を助け、手足となって、この祝福の宴が起こっています。弟子たちは、きっとこの時のことは生涯忘れられなかったでしょう…。**わずかなパンと魚が、イエス様が手にされると、そこにいる全員が、誰一人漏れなくその奇跡に与ったのです。**いや、パンと魚はまだ十二の籠一杯になるほど余ったというのです。これはまるで「**神の国**」の光景のようです。天の祝福。「キリスト・イエスにある者は、勝ち得て余りあり」（ロマ8章）。みんなを祝福して、さらに溢れ流れていくような神様の恵みです。

[2] 「満たされなさ」に届く主の言葉

イエス様がこのような奇跡をなさるその発端・背後には、人々の「満たされなさ」がありました。そのことをイエス様は**憐れまれた**のです。32節以下にこうあります。—「そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、**飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた**」。この場所は「**寂しい所**」です。人の心を象徴しているようです。私たちは皆、心に寂しい場所を持っています。親しいようでも本当には分ち合えない、どうしようもない悲しみ、痛み、孤独を感じる時があると思います。自分では解決できない「闇」が時折自分の中に浮かび上がり、迷路に入り込むような時もありますよね。イエス様には、人間が「**飼い主のいない羊のよう**」に見えたのです。独りぼっちな羊はどうなってしまおうでしょうか…。でも**あなたたちは決して独りではない！**と、**主は深く憐れまれました**。これが聖書が語る神です。救い主です。そして「**いろいろと教え始められた**」。この方は私たちに「**言葉**」を語られるのです。

私たちは毎週礼拝を捧げています。その中心は「**神の言葉を聴く**」ことです。私

たちを深く憐れんで下さる、愛して下さる愛の言葉を聴きます。心の中の「寂しい所」に神様の言葉を受け止めていくのです。そのためには神様の言葉を聴く「準備（備え）」というのが必要です。D・ボンヘッファーという牧師・神学者の書いた『共に生きる生活』という素晴らしい本がありますが、その本の「ひとりである日」という項目の中で、彼はこのように勧めています。—「キリスト者の一日には、定められた沈黙の時が必要である。それは特に、み言葉を聞く前と後の時であろう。み言葉は、騒がしい人ではなく、沈黙している人に来る」。この「み言葉は、騒がしい人ではなく、沈黙している人に来る」という部分は、私の心にグサッと来ます。はたして私は、心から神様の言葉を待ち望んでいるだろうか。自分が神様の言葉によって変わりたいと思っているだろうか、と。「礼拝」には、沈黙が必要です。「私」を脇に置き、主の言葉に聞き入るとするのは、「寂しい所」に出ていく必要があるのだと思います。（『共に生きる生活』新教出版社 p. 73 参照）

[3] 「一緒に」主の言葉を聴くために

この群衆は、時間が経ち、日が傾き始めてもイエス様のもとを去りませんでした。飢えていたのだと思います。神様の言葉に。そしてイエスの言葉が心に染みて来たのではないのでしょうか。弟子たちの方が心配して「もう解散させないと。食べるものもないです」というようなことを言います。するとイエス様は「あなたたちが彼らに食べ物を与えなさい」と言われます。私は思いました。これが「協働」ということなのかなと。イエス様は当然お一人でも御業を進めることは出来る方です。でも、その恵みの現場に共に与らせ、体験させて下さるのです。ここでは12人の弟子たちですね。イエス様が祝福されたパンと魚を配りました。それが五千人以上の人々を満足させたという奇跡。これは、**神の秘儀**だと思います。やがて起こる「**主の晩餐式**」も前触れとも取れる「**神の国**」の秘密だと思います。主が祝福されたものを人々に配る時に、足りないどころか、余ったものを数えても十二の籠一杯になったと言います。神様の恵みは正に**無尽蔵**です。それを真っ先に体験した者は、主の御用を手伝った弟子たちです。

私は、この物語は、「**教会**」の物語であるように思えてなりません。群衆は初めからパンを求めてきた訳ではありませんね。「**神の言葉**」を聴きたかった。それが求めの原点です。その原点に帰りたいたいと思うのです。教会の原点。「**私と神様**」との**関係**です。組織第一ではありません。信仰は極めて個人的な事柄です。組織につながっていれば良いことではなく、神様は「私の信仰」を御覧になります。これは何度でも確認したいことです。と同時に、私たちは「**共に**」礼拝をすることが大事なのではないでしょうか。今日の箇所、50人或いは100人づつの組を作って座らせたとあります。そこに「仲間」が出来ました。多くはお互い初対面で

あった人々であったのではないのでしょうか。でもイエス様の言葉を聴くために一つとなった。これが「教会」ではないかと思えます。ここにも様々な人々がいたでしょう。子どもを背負った母親や、若者に手を引かれる年老いた者、体の不自由な方も障がい者もいたかもしれないと思えます。その人々が「一緒に」主の言葉を聴くのです。そこでいのちのパンを頂きます。そのために一つとされた素晴らしい空間が生まれました。天来の教会がここに生まれました。今日の箇所、50人集まって座らせられた。何が起こるだろうと期待があったでしょう。どんな言葉を語って下さるにか、と。今の時代に当てはめるとどうかなと考えてしまいました。すぐにスマホをいじりだして、主の言葉を聴こうなど言うのはすっ飛んでしまうかもしれません…。

ここでのホスト役は主イエス様です。このお方は、パンと魚を増やしただけではありません。それは、ある意味朽ちるものです。このお方は、やがてご自分を指して「わたしが命のパンだ。これはわたしの体だ。これを食べよ」と晩餐式を開き、その翌日十字架でご自分のお体を裂き、血を流して下さったお方です。私たちを愛し、赦し、永遠の神の国に招く道を開くために。その主は「永遠の生命に至る食物のために働きなさい」と言われました。それは直接伝道者になる・ならないということではないと思えます。「わたしの作った交わり、教会」を重んじ、互いに支え合いながら共に働いてほしい（「協働」）、と願っておられるのではないのでしょうか。この地上に「教会」が存在していること。これより大きな奇跡は無いと言えるのです。

このコロナの中で教会の礼拝は不要不急なののでしょうか。そうではありませんよね。イエス様はおっしゃいました。「わたしが生きるので、あなた方も生きる」（ヨハネ 14:19）。本当にそうです。ここに、主がおられるのです。まず主の言葉を慕い求めましょう、ご一緒に！川越教会も、この場所で「あなたはここに座りなさい」と私たちに用意して下さったのではないのでしょうか。そして、新しい方を喜んでお迎えしましょう。昔の者も新参者もありません。大人も子供もありません。あつてはいけませんよね。もちろん性別も、様々な環境も。2022年もまだ始まったばかりです。主によって、ヴィジョンを見せて頂きながら、共に祈りながら進んで参りたいと思えます。お祈り致します。

神様、今日も礼拝の場と時を与えて下さってありがとうございます。この恵みは、私たちすべてを包み、更に私たちを超えて流れ出てゆきます。スケールの大きなあなたの愛、十字架と復活の福音の大きさ、それに満たされ、またそれと一緒に伝える働きの中へと私たちを押し出してください。ここに神の国の雛形があることを感謝します。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。